



278

この記事がすごい！ 毎日新聞今週のこだわり4本

2025年9月7日号

編集／毎日新聞社カスタマーリレーション本部

迫る



私はどこから来たの？ 半世紀前の赤ちゃんあっせん事件

約50年前、宮城県石巻市で「赤ちゃんあっせん事件」が発覚しました。ある産婦人科医が、「望まない妊娠」をした妊婦から生まれた赤ちゃんの出生証明書を偽造し、生みの親とは別の親にあっせんして引き渡していました。当時このような行為は違法であり、医師は「赤ちゃんの生命を救うため違法覚悟でやった」と主張しました。

医師は略式起訴されますが、国会などでも議論になり、養子を法的に実子と同じ関係にする「特別養子縁組制度」につながりました。医師が引き渡した赤ちゃんは220人以上になります。医師は多くの命を救ったとして国際的にも評価されました。

その一方、現在、「自分の出自を知りたい」と悩む女性が続いています。宮城県内に

7日(日)=1、3面

住む佐藤晃子さん＝写真＝です。育てられた環境などから、自分は両親から生まれた子ではない、と疑うようになります。母の遺品から見つけた母子手帳には、その医師の名前がありました。自身の出自を知る権利については、最近議論が進み、肯定する司法判断も出ています。女性の苦悩に迫りました。



来年のミラノ五輪にロシア選手が出場？

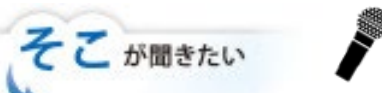
9月7日(日)=総合面



前回大会の北京冬季オリンピックの開会式

ミラノ・コルティナ冬季オリンピックの開幕（2026年2月6日）まで、半年を切りました。19日からは北京でフィギュアスケートの五輪予選が開かれます。この予選には、ロシアとベラルーシの

一部の選手が、「個人の中立選手」として参加を認められました。ロシアによるウクライナ侵攻が続く中、ロシアや同盟国のベラルーシの選手はなぜ、出場が可能になったのでしょうか。



日ソ戦争の現代への教訓

7日(日)＝くらしナビ面

第二次大戦最後の全面戦争とされる「日ソ戦争」から今年で80年。戦後日本にシベリア抑留、中国残留孤児、北方領土問題などの爪痕を残した戦争は、ソ連の後継国ロシアがウクライナを侵攻した現在、改めて光

を当てる意味があります。ソ連崩壊後に発見された史料を基に研究を続ける麻田雅文・成城大教授（東アジア国際関係史）＝写真＝に、この戦争の教訓を聞きました。

特集 ワイド

専門家が読み解く参政党憲法案

9月8日(月)=夕刊2面

7月の参院選では、参政党が憲法をゼロからつくる「創憲」を掲げたことで、図らずも現行の日本国憲法にも光が当たることになりました。参政党の構想案には憲法にある人権規定がほとんど明記されておらず、

インターネット上で異論も指摘されています。

憲法の理念について30年近く普及活動をしている「憲法の伝道師」こと伊藤真弁護士＝写真＝はどう見るのでしょうか。話を聞きました。



能登半島地震から1年9カ月がたちました。毎日新聞社では10月4日に、一緒に被災地を支援するお子様が登壇するオンラインイベント「毎小ミライ」を開催します。加えて、手数料などを除いた全額を石川県と日本赤十字社に寄付するの支援に、被災地支援に協力します。お子さんやお孫さんと一緒に参加いただけるイベントにぜひみなさまの参加をお待ちしています。

(斎藤広子)

